

症例検討

太郎丸店

塩酸バンコマイシンによる感染性腸炎の治療について

今年4月、老人ホームの入所患者様に、塩酸バンコマイシンが処方されました。
自店で扱う初めての医薬品であった為、塩酸バンコマイシンによる治療について調べてみましたので、報告させていただきます。

[患者情報]

M. Nさん 80歳 男性

[患者背景]

今年2月に老人ホーム入所。

前医（A病院）からの処方で、定期の薬と共に、ロペミンカプセル1mgも2Cp.分2で同日数分処方。

その後、定期薬14日分に対してロペミンカプセル10日分の処方が3月後半まで続いたのち、一度ロペミンの処方が削除されたが、2日後にロペミンが追加処方。

4月、定期処方とは別日に、塩酸バンコマイシンが処方されるに至る。

[処方内容]

H23.4.14	塩酸バンコマイシン0.5「MEEK」	4瓶	
	分4 毎食後、就寝前		7日分
	ビオフェルミンR錠	3錠	
	分3 毎食後		7日分

※定期薬は、ルプラック錠4mg、アルダクトンA錠25mg、スローケー600mg、
テオドール錠100mg、コンクチームN配合顆粒、マーズレンS配合顆粒、
ウインタミン細粒、リスミー錠2mg、ランドセン錠0.5mg、アリセプトD錠5mg
※2月に皮膚科からの処方プロペト（お尻の保湿の為に）50gも処方あり。

今回の患者様は、椿野苑入所前から下痢症状が長く続いていたと思われ、入所後もしばらくロペミンの処方が続いていましたが、塩酸バンコマイシンによる治療が成功したようで、治療後はロペミンが処方される事もなくなり、下痢症状は改善したと思われま。

次に、今回の処方をきっかけに塩酸バンコマイシンについて調べた事をご紹介します。

バンコマイシン (Vancomycin、VMC) は、グリコペプチド系抗生物質のひとつ。

真正細菌の細胞壁合成酵素の基質である D-アラニル-D-アラニンに結合して細胞壁合成酵素を阻害し、菌の増殖を阻止する働きがある。大部分のグラム陽性菌に殺菌作用をもち、腸球菌に対しては静菌作用がある。

ほとんどの抗生物質が効かないMRSAを殺菌することが出来る。 このため、過去には最強の抗生物質といわれたこともあった。塩酸バンコマイシンは水溶性で、分子量が 1486 と大きい薬物であり、内服してもほとんど吸収されることがないため、腸などの消化管内の静菌・殺菌に有効である。内服または点滴静注で使用される。点滴静注による急速投与が原因となり、Red neck (Red man) syndrome と呼ばれる皮膚合併症や血圧低下などを来す場合がある。

効能・効果 1.感染性腸炎（偽膜性大腸炎を含む）

〈適応菌種〉バンコマイシンに感性のメチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）、クロストリジウム・ディフィシル（C.difficile）

2.骨髄移植時の消化管内殺菌

用法・用量 1.用時溶解し、通常、成人 1 回 0.125~0.5 g（力価）を 1 日 4 回経口投与。

2.用時溶解し、通常、成人 1 回 0.5 g（力価）を非吸収性の抗菌剤及び抗真菌剤と併用して 1 日 4~6 回経口投与。

MRSA および C.difficile は院内感染の原因菌であり、患者から患者への感染の伝播が問題となる。特に C.difficile は抗菌薬誘導下痢症（ADD）や偽膜性大腸炎（PMC）の原因菌として、臨床的に注意すべきである。

C.difficile 関連下痢症（CDAD）は、何らかの感染症に罹患し抗菌剤を投与した場合に、感染原因菌の抑制のみならず正常な腸内細菌叢をも破綻させてしまい、その結果として C.difficile の増殖および毒素産生が誘導されて発症する。

C.difficile は芽胞形成性のグラム陽性嫌気性細菌であり、抗菌薬存在下では芽胞を形成し、各種抗菌薬および消毒に対し抵抗性を示して接触伝播することが知られている。

一般的な CDAD の治療戦略は、使用抗菌剤の中止ならびに VMC (0.5~2.0g/day) の投与が行われるが、腸内細菌叢の正常化を目的に整腸剤の併用も試みられており、臨床的な有用性も報告されている。併用する整腸剤としては、耐性乳酸菌製剤等がよく知られているが、これらの耐性乳酸菌の多くは VMC に対して耐性を持たず、VMC 併用下においては効果が期待できないと考えられる。

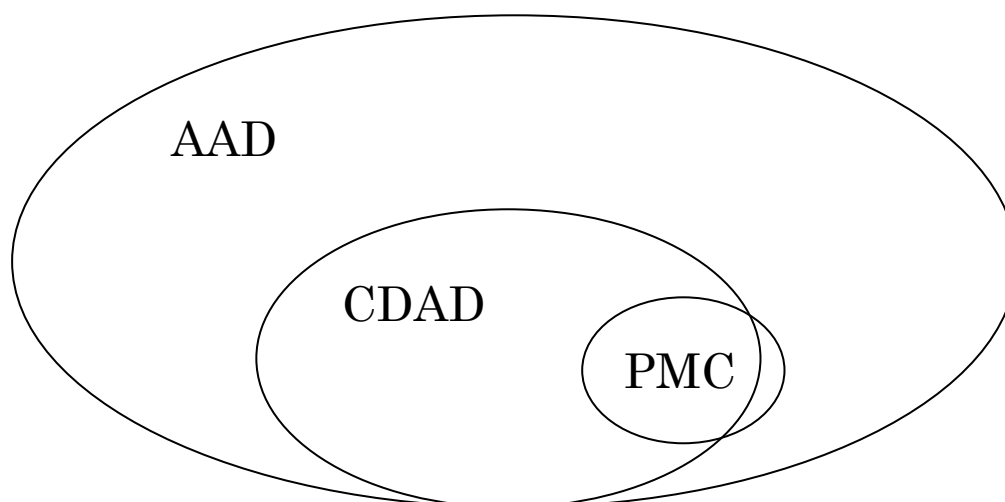
これに対し、Clostridium butyricum MIYARI 588 株（ミヤBM）は C.difficile と同様に芽胞形成性のグラム陽性嫌気性細菌であり、VMC に対し耐性であり各種抗菌薬と併用しても、腸管内において増殖することが実験的に報告されている。

さらに、C. butyricum は C.difficile に対する感染防御効果を有することが報告されていることから、CDAD の VMC による治療時に、C. butyricum 製剤を併用すると有効であるとの報告もある。

CDAD ≠ 偽膜性腸炎

AAD > CDAD > 偽膜性腸炎

- AADに含まれるCDADの割合は15 - 25%と言われる。
- CDADの重症型に偽膜性腸炎がある。



AAD : Antibiotic associated diarrhea

CDAD : C.difficile associated diarrhea

PMC : pseudomembranous colitis

抗菌薬誘導下痢症

C.difficile 関連下痢症

偽膜性腸炎